Title	『はじめてのキング牧師』(R.バロウ著、山下慶親訳、教文館、2011 年 243＋v頁)
Author(s)	森田，美千代
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.5, 2012.3：37-38
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3863
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

『はじめてのキング牧師』
（R. バロウ著、山下慶親訳、教文館、2011 年、243 ＋ v 頁）

森田　美千代

本書『はじめてのキング牧師』は、Rufus Burrow Jr., *Martin Luther King Jr. for Armchair Theologian*（Westminster John Knox Press, 2009）の翻訳書である（原著では、BurrowとKingのあとにカンマがない）。

著者バロウは、訳者によれば、マーティン・キングと同じくボストン大学で博士号を取得したアフリカン・アメリカンの神学者であり、現在はインディアナポリスにあるクリスチャン神学校の教授である（241頁）。また訳者によれば、バロウは、キング、黒人神学、人格主義などに関する著作がある（241頁）。たとえば、以下のごとくである（242頁）。

James H. Cone and Black Christian Theology（McFarland & Co., Inc., 1994）.

Personalism: A Critical Introduction（Chalice Press, 1999）.

God and Human Responsibility: David Walker and Ethical Prophecy（Mercer University Press, 2003）.

God and Human Dignity: The Personalism, Theology, and Ethics of Martin Luther King Jr.（University of Notre Dame Press, 2006）.（バロウは、Kingのあとにカンマをつけていない）。

翻訳者は、山下慶親氏である。山下氏は、1974年にバンゴア神学校を卒業し、現在は学校法人四国学院理事長である。氏は多くの翻訳書を出している。キング関係では、C. ジョンソン、B. エイデルマン編　『私には夢がある―キング牧師フォト・ドキュメント』　日本キリスト教団出版局、2005年　がある。したがって、本翻訳書は、最適任者によって訳されたと言ってよい。

書評者は、今回書評するにあたって、これまで多くの研究者によって言いふるされていることを繰り返すのではなく、著者バロウの新しい掘り起しに着眼して、書評を試みたいと思う。それは、キングの人格主義について、キングの女性観について、そして青少年（青少年ということばによって、書評者は、子どもから大学生までをも含んでいる）に対するキングの愛と期待について、である。

キングに影響を与えた人物や思想として、これまでヘンリー・ソーローの不服従思想、ウォルター・ラウシェンブッシュのソーシャル・ゴスペル、マハトマ・ガンディーの非暴力思想、ラインホールド・ニーバーのキリスト教現実主義などが挙げられてきた。しかし、今回本書によって、キングに影響を与えた思想として、人格主義（Personalism）がとりあげられたことは、注目してよい。それは、キングがボストン大学で人格主義を研究していたことが、キングのその後の人権運動と深く結びついていると、書評者は確信しているからである。本書の著者バロウは、前掲したように、人格主義についての著作があり、人格主義についての研究者でもある。そうであるならば、バロウは、人格主義についてもっとスペースを割いて論じるべきではなかったかと、書評者には感じられる。人格主義についてのバロウの述べ方には物足りなさがある。

（キングの人格主義思想については、次の論文が参考になる。菊地順　「M.L.キングの神観念と人格主義思想―博士論文を中心として―」　『聖学院大学総合研究所紀要』No.46、2009年、245－337頁）。

次に、バロウは、キングの女性観について、どう考えたか。キングは進歩的な女性観をもっていた、あるいは、保守的な女性観をもっていたというように、二者択一的に、バロウは言い切っていない。バロウは、「女性に関するキングの姿勢に

は明瞭な二面性（ambivalence）があった」（185頁）と結論づけている。たとえば、そのことが端的にあらわれているのが、キングとその妻コレッタとの関係であると、バロウは言う。バロウは、次のように描く。「キングは自分には良き妻、子どもたちには良き母となって、仕事から帰宅したときには出迎えてくれる女性を望んだ。彼はまた、知的で自分の考えを持った友［この場合は、妻コレッタのこと］を望んでいた。コレッタには、彼の心を惹くこれらの特徴やその他の特徴があった。しかしながらキングは、男性が家族の長であるべきだということも信じていた」（60頁）。書評者も、女性に関するキングの姿勢には二面性があったとするバロウの見方を採る。そのことは、キングは進歩的な女性観をもっていたときっぱりと言い切れないことでもあるので、キング研究者にとっては残念なことである。

第三点目であるが、「子どもたちに対するキングの心底からの愛、称賛、尊敬についてはほとんど議論されていない」（128頁）とバロウが述べるごとく、子どもに対するキングの愛と期待については、これまでほとんどのキング研究者によって見過ごしにされてきた点である。その点に着眼して、多くの頁数を割いて、バロウが「子どもに対するキングの愛と期待」について記してくれたのは、本書の最大の特徴のひとつと言ってよいだろう。書評者も、キングがどんなに子どもたちに対して愛と期待を抱いていたかを、これまで折に触れて感じていた。しかし、今回バロウというキング研究者によって、そのことが明言されたのは、今後のキング研究の多様性を促すものとして、貢献するところ大なり、と言うことができよう。

「モンゴメリからメンフィスに至るまで、ほぼすべてのキャンペーンで青少年が関わっていた」（128頁）と、バロウは言う。たとえば、バーミングハムのキャンペーンでは、多くの子どもたちが、デモ行進に参加した。その結果、子どもたちが未成年拘置所に入れられたとき、キングは、「子どもたち一人ひとりを抱きしめて握手したり、拘置所の外側のフェンスから子どもたちに語りかけたりした」、という（138頁と141頁）。他方で、キングとは対照的なブル・コナーの対し方を、バロウは、次のように描き出す。「ブル・コナーが行進中の子どもたちに対して高圧消火ホースと戦闘犬を使用するように命令したとき、すべてのことが全国放送のテレビに撮影された。人間として扱われる権利のためにデモ行進をしていた無実の子どもたちに対するこの残虐な扱いが映像としてテレビ・ニュースで速報されたとき、国内および世界中の多くの人々から歓迎されなかった」（143頁）。ブル・コナーによって、キングの、子どもたちに対する愛と期待が逆にどれほど深いものであったかがよくわかる場面であると、書評者には思える。

しかし、「キングは、バーミングハムで子どもたちを危険にさらすことが黒人の親たちやその他の人々から痛烈に批判されることをあらかじめ知っていた。実際のところ、子どもたちを巻き込んだことで、マルコムXその他から厳しく批判された。［けれども、］知的にも、そして戦略的にさえも、キングは運動の最前線に子どもたちを送り込むことはなすべき正しいことだと確信していた」（152頁と141頁）と、バロウは述べている。

以上、キングの人格主義、キングの女性観、そして青少年に対するキングの愛と期待を中心にして、バロウによる『はじめてのキング牧師』の書評を試みた。

『はじめてのキング牧師』
R.バロウ著/山下慶親訳
税込定価1,995円
発行:　教文館
ISBN978-4-7642-6688-9

（もりた・みちよ　聖学院大学総合研究所教授）